
遠坂凜がダンサーのサーヴァントを召喚したようです

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠坂凜がダンサーのサーヴァントを召喚したようです

【コード】

N1038P

【作者名】

暁

【あらすじ】

何処にでもいる普通の魔術師遠坂凜は

何処にでもある普通の町で

何処の家でもある悲願の達成のため

何処にでもいる普通のサーヴァントを召喚し

聖杯戦争を勝ち抜く・・・はずだったのだが？

登場人物ステータス（前書き）

自分が連載しているもう一つの小説の方はアンケート募集中なので執筆しちやいましたb

勢いで書いた、後悔はしている。

今回はオリキャラ（サーヴァント）のステータスを載せたので皆さん・・・真名を当ててみてください！

登場人物ステータス

CLASS ダンサー

マスター 遠坂凜

真名 不明

性別 男性

身長/体重 180cm 体重50kg

属性 秩序・善

筋力 B 魔力 S

耐久 B 幸運 EX

敏捷 A 宝具 EX

クラス別保有能力

対魔力：C

第二節以下の詠唱による魔術を無効化する。
大魔術・儀礼呪法など大がかりな魔術は防げない。

保有スキル

直感：B

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を”感じ取る”能力。
視覚・聴覚に干渉する妨害を半減させる。

超直感：A

常に日頃から自身にとって最適な展開を“予知する”能力。
このランクだと自分の意思で三十年先まで未来の全ての可能性を予知する事ができる。

しかし脳に送りこまれてくる情報が膨大なため完璧に予知できる量は二、三日分まで、

さらに必要な情報と不必要な情報を選別するのに膨大な時間がかかるために実質、戦闘では役に立たない。

直感Aとは別の物

神性（偽）：A

自分の死後、民衆たちにより崇められ、疑似的に神格化したためについた神性。

余りにも熱烈な信仰なためその神性は既に最高レベル。

カリスマ：A++

世界中の民衆を自分の崇拜者にする、努力・才能の結晶。ここまでくると人望ではなく魔力、呪いの類である。

黄金律：C

身体の黄金比ではなく、人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。

努力の多さに比例してお金が入ってくる、努力次第では一生金に困らない。

言葉の重み：B

自身の言葉にどのくらいの重みがあるか。

このランクだと『死ぬ』と言われれば、『自殺しても構わない』と、錯覚を与えてしまうほど、

さらに高確率で相手に重圧を与えて能力をワンランク下げる、ただし重圧に慣れれば能力は元に戻る。

所有宝具

神の宣告 (The god's sentence)

彼の生前の偉業が宝具化したもの。

彼の言葉・声自体が宝具であり、声で出した物は全て事実になってしまう。

カラスが白いと言えば白くなる。

世界を改変するため魔力の消費量が凄まじい、常時発動タイプの宝具なので声を出すだけで魔力を消費する。

ただし神性を持つ物・者には効果が半減か無効化されてしまう。

ランク EX 対世界宝具

手袋 (Gloves)

彼が生前愛用していた手袋。

元はただの手袋だが、彼への崇拜者の影響によって宝具にまで上り詰めてしまった。

手首から先まで限定だが、平行世界の干渉さへも防ぎきる事ができる。

ランク EX 結界宝具 防御対象1人

不明

彼のカリスマ性が具現化した宝具らしい。

登場人物ステータス（後書き）

執筆しながら思ってたんだけど

オリキャラチートだなあ・・・

それと、本文の文字カウント： 1000字

気持ち良いなあ

遠坂凜はサーヴァントの召喚を失敗したようです

私こと遠坂凜は何処にでもいる普通の魔術師です。

魔術師って時点で普通じゃねえだろと言うツツコミが四方から聞こえてきますが

世間一般の魔術師から見たらきつと普通の魔術師なんだと思います。

そして実は私、冬木って町の管理者をやっています、とっても優秀なんです。

管理を任されるようになってから、特に何の問題も起こさず今までやってきたわけなんだけど、この前某友人と話していて聞いたたら私の評価って想像していたのと全然違うみたい。

どうやら私に対しての世間一般的な評価を総合して一言で表すと、『遠坂ってさあ、あらゆる事をそつなくこなすけどお、ここ一番で失敗するよね〜あはっ』

だそうです、フザケルナ。

私の努力を知らないくせしてよくあんな酷い事を言えるものよ。

私だってね。。。私だってね、やる時はちゃんと失敗せずやるわよ！！

そう思っていた時期が私にもありました。

どうやら今回も大事な時に大失敗をしでかすという遠坂の呪いが作

用したみたいです。

第一話 遠坂凜はサーヴァントの召喚を失敗したようです

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

「セツト」

「告げる」

「告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

魔方陣を中心として魔力が満ちていくのがわかる。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ」

その瞬間、魔法陣を中心に目を開くのすら困難になるほどの光があらふれ出る。

やった!!

その手ごたえに凜は会心の笑みを見せる。

今までにない会心の出来に確信を持つ。

間違いなく自分はセイバーを引き当てた！！

ワクワクしながら自分が召喚したサーヴァントを探す。

しかし、光が収まった後魔方阵に現れる筈の肝心のサーヴァントは影も形も無かった。

「ち、ちよっと・・・どういうことよ？これ？」

啞然としていた凜だったが丁度上の階・居間からとんでもない轟音が響き渡る。

「な、何よ一体今度は！！！」

そう言いながら凜は階段を駆け上がる。

三十秒ほどで目的地に辿りつきドアを開ける。

「何よこれ？」

と、思ったがドアがひしゃげているらしくビクともしない。

「あああああ、もう！！！」

今日一日の鬱憤を晴らすため、右足に残った魔力をつぎ込みドアを蹴り破る。

ドアを開けた先、そこにあつたものはめちゃくちゃになった居間、おそらく半壊、いや全壊しているだろう。

そしてその中心、何物も寄せ付けないオーラを放ちつつ、なんか良くわからないポーズを取っている男の姿があつた。

そしてその男は静かに顔を上げ、家主である私の事を見詰め、こつこつ
呟いた……

「ポオーオーウツ!!」

もう、帰っていいかな……私。

この時、遠坂凜は今自分が人生最大の分岐点を誤った方向に進んでしまっているという事に、まだ気がついてはいなかった。

遠坂凜はサーヴァントとと交流を深めたようです

「ポオooooooooウツ!!!」

そう彼が言った瞬間、

体全体に信じられないほどの重圧がかかり、まるで穴が開いた風船から空気が抜けていくかのように体から力が抜け膝をつく。

信じられない、これがサーヴァントという存在なの？

本当に、規格外だ……。

第二話 遠坂凜はサーヴァントとと交流を深めたようです

めちゃくちゃになった居間、その中心には先ほどから奇妙なポーズを取っている男（多分わたしのサーヴァント）の姿がある。

まず彼の容姿だが、

長身で黒いフェドラ帽を被っていて、ミリタリー調なジャケット・スーツを来ている。

片方の手には、おそらく何百個のクリスタルがはめられてるであろう手袋、

足には黒革のローファー。

明らかに戦闘服じゃない。

こんな格好をしている男が到底過去の英霊だとは思えず困惑していた遠坂だったが、何もせずには自分を打開できないと気がついたのか、勇気を持って話しかけた。

「・・・アンタは私のサーヴァントなの？」

暗茶色の瞳で私を何か血走ったような感じで見つめてくる私のサーヴァント

き、気持ち悪い・・・

『・・・は・・・が・・・い』

頭に直接響いてくる声、念話？

「え、何？、聞こえなかったからもう一度言ってくれないかしら？」

『僕には覚えがない。』

「は？」

啞然とした、彼は何を言っているのだろうか。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！、覚えが無いって・・・あなたが召喚に同意したからここにいるのですよ、訳のわからない事は言わないでちょうだい。」

『その子は僕の息子じゃない!!』

！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！
！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！
！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！
！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！
！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！
！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！これは罨だ！

アラームのなった目覚まし時計のように、彼の言葉は私の頭の中に流れてくる。

「うるさい、うるさい、うるさい！！サーヴァントなら、マスターには絶対服従ってもんでしょーーーー！！！！！！」

まさか令呪を使うとは思っていなかったのか、サーヴァントが驚いた顔で止めようとするが、既に動き出したものは止まらない。令呪の一角が煌々と輝き、そして明るさを失う。

光が収まった後そこにいるのは、まだ少し息が上がっているのか、少し息が荒い遠坂と、思わぬ令呪の効果に目を見開いているサーヴァント。

「はあ、はあ。。。はあ」

『すまないマスター、僕は君を少し誤解していたようだ』

「はあ・・・はあ、誤解、ですって？」

『ああ、最初僕はこんな乱暴な召喚をしたマスターとは縁を切つてすぐ消滅する予定だったんだ。』

!?

『だから最初はおかしな行動を取ってマスターに嫌われようとしていた。』

こいつ、よくまあ私の前でそんな事どつどつと言えるわね。

『僕は君に対して召喚に対する不満はあるけど。マスターとしては一流だと思っているよ。』

供給される魔力の量が申し分ないし、まさかあんな命令でここまです縛られるとは思ってもいなかったよ。』

「っ!?!?っくそ そんなことより、

あんたは私をマスターと認めるの? 認めないの?」

『っふ、君をマスターとして認めよう。サーヴァントダンサー、君のサーヴァントとしてこの聖杯戦争を戦い抜く事をここに宣言する。』

「なんだ、セイバーじゃないの?」

『セイバーでなくて悪かったね、けれどもそれを言うなら・・・いや止めておこつ。』

もう終わったことだからね。』

「あんた言う事がいちいち腹立つわね」

『まあ、これが僕だからね、これから先よろしく頼むよ。』

「ええ、私は遠坂凛」

『そうか・・・では凜と呼ばせてもらおう・・・ああ・・・あの響きはとても君にあっている。』

「ち、ちよつと！あんだ何言っているのよ！！」

「何ってただ感想を言っただけなんだけど。」

「・・・それよりもダンサー、早速だけどあんだの真名を聞きたいんだけど、あんだどうみても英霊にはみえないから気になるのよ？」

私の問いに彼はもったいぶるかのように間を開けてこう言った。

『僕の真名はマイケル、マイケル・ジャクソンさ。』

遠坂凜はサーヴァントと遭遇したようです（前書き）

『』でダンサーが話している時は全て凜に対して行っている念話です。

遠坂凜はサーヴァントと遭遇したようです

ランサーは困惑していた。

現在の状況を一言で表すのならば ついていない である。

彼の近況を語るのならばこうだ、

いけ好かない現マスターの忌々しい令呪によって、主変えを強制的に賛同させられた。

全てのサーヴァントと戦って、一度目は倒さずに生還しろという無理難題を押し付けられた。

ただど別に後者は不可能な事じゃない、彼はサーヴァント中最速の肩書を持つランサー

彼の速力ならば、どのサーヴァントからも逃げ切る事は可能である。

しかし彼が言った ついていない とは、全くもって別問題である。

たしかに、前のマスターであるバゼットが殺されてしまったのもついでにない。

サーヴァントと遭遇し戦闘しても、実力を出し切れなれないというのもついていない。

では一体何についていないと言うのか？

それはもちろん、深夜の屋上にて敵マスターと対峙し、長身で黒いフェドラ帽を被ったサーヴァントと戦闘になってしまった事である。

「まったく、今回は本当についてないぜ。」

第四話 遠坂凜はサーヴァントと遭遇したようです

穂群原学園

の校庭でジャケットスーツ男と全身青タイツの男がぶつかりあっていた。

無数の攻防が繰り広げられている。

全身青タイツの男の真紅の魔槍が無手である、ジャケットスーツ男を襲う、
がまだ一度も彼を負傷させるに至ってない。

スーツ男は信じられない事に、片手を頭の上に置いた状態でランサーの猛攻、高速の突きを最短の動きで避け、手袋で受け流し、カウンターを入れていた。

「っちい、無手で戦うとは余裕だな、その慢心が身を焦がすぞ。」
自分は手加減されているという事実と、
先ほどからダメージを全く与えていないという結果に少々苛々しつつ言う。

「.....」

「黙まりかよ・・・だがしかし解せねえな、何故本気を出さない？
テメエ程の英雄ならば俺を殺す事なんざ容易いはずだ。」

彼の戦場を走り回っていた経験が、嗅覚が、スーツ男の場違いさを

完全に見抜いている。

「……」

この問いにも無言を返すスーツ男、だが実際は喋ってしまったと魔力を大量に消費してしまつたために返事ができないだけなのだが、青夕イツには知る由が無い。

「　　」
　　「　　」

その瞬間、ランサーの殺気が、膨れ上がった

先ほどまではただのお遊び、彼は本気を出したのだろう

「本気をだしな、少しでも俺のスピードについて来れなくなった時がテメエの死ぬ時だ、

ほら、さっさと得物を出せ、それまでは待つてやる。」

「その通りよダンサー、本気を出しなさい、

幸いランサーは待つていてくれるわ、貴方の本気をここで見せて！」

『ふむ、だけど凜、

僕は生前戦場になんて立った事が無いから戦い方なんかわからないんだ、今までは直感に従つて行動してただけだし』

途端、その事実が気がつき顔を歪める遠坂、

今までは普通に戦つていたから忘れてしまつてた、彼の真名を。

『だけどマスターの期待に応えないわけにはいかないよな、

凜、宝具の使用許可を、ランサーはここで倒す。』

「!?!?・・・分かつたは、ダンサー宝具の使用を許可する、

ランサーを倒しなさい！」

『了解した!!』

「ポオーーーーーッ！」

途端、ランサーに重圧が遅いばかり、能力をワンランク下げる。

「やっと本気を出しやがったか、いくぜ。」

瞬間、空気の鳴く音が聞こえ、ランサーが動いた。
真紅の魔槍を下段に構え、ダンサーの心臓を貫くべく突進する、

透き通るような声が聞こえた気がした

「世界に問う、我と対する青い槍兵に害を、

大肢下肢長指伸筋および前脛骨筋および腓腹筋および膝蓋靱帯の
切断を了承せよ。」

長指伸筋 切断に了承

前脛骨筋 棄却

腓腹筋 切断に失敗、負傷止まり

膝蓋靱帯 切断に了承

「!?!? つぐ、つがぁ」

途端前方と後方から呻き声が聞こえてくる、

前方からの声はダンサーの宝具、神の宣告 (The god's sentence) によって傷を負ったランサーの声だろう。

ならば後方からの声は？

『凜、魔力供給をカットしろ、君が危ない!!』

それは急に魔力を大量に持っていかれてしまった凜の声であった、いくらダンサー大量の魔力を最初から持っているとは言え、魔力が減れば供給するのがマスターだ

本来ならばサーヴァントが魔力を消費した場合少しずつ魔力を供給させていくのだが、

今回は使用した分の魔力量が多い、桁違いと言っても良い、それにより供給する魔力自体が多くなり、魔力切れを起こしかけた。おそらくこのまま供給を続けていけば凜は魔力切れを起こし運が悪ければ死んでいた。

世界を改変させるというのはそれほどまでに魔力を消費するのだ。

「つちい、止まらねえ!?!」

足の筋肉を負傷し、このまま突進してはまずいと瞬時に判断し止まろうとしたが良いが、既に勢いがついてるために止まる事は叶わない。

そんな隙をダンサーが見逃すわけが無く、地面でステップを踏んだと思った瞬間、
残像を残し消え、ランサーの鳩尾に渾身のストレートを叩きこむ！
戦場に立った事の無いダンサーの精一杯の攻撃、

それを有ろう事かランサーは空中で槍を地面に突き刺し体を捻る事で避けてしまう。

完璧な一撃だった、空中では回避運動はできないと踏み、目で見切れないほどの高速で飛び、ストレートを叩きこむ。

絶対に当たるはずだった。

だがランサーからすれば戦場を経験していないストレートなど、こちらのチンピラのパンチと一緒にある。

ステージで名声を取り英雄になった者では、戦場で武功を立て英雄になった者に、戦闘では勝てない。

これは既に決まっている事である。

ランサーが攻めに転じ、それによってできた隙をランサーが見逃すわけが無く、大きく後ろに飛び下がる。

「……いいぜ、訊いてやるよ。テメエ何処の英霊だ。主力武装が手袋の英霊なぞ聞いた事がない」

「……………」

「ッチ、無言が答えか覚悟はできているだろうな？」

「食らうか、我が必殺の一撃を」

全てを凍りつかせる殺気。

その瞬間に、今回の戦闘で初めてとなる構えをとるスーツ男。

二つの強力な力がぶつかりあおうとしたその瞬間

「誰だっ……………！」

「……………!？」

第三者の介入によってこの戦闘はクライマックスに差し掛かる。

「も、目撃者!？」

目撃者は消す。

その魔術師の鉄則にしたがい、ランサーがここの学生らしき人を追っかけていく。

「ダンサー、追って！ さっきの学生服の彼、ランサーに殺されちゃうわ。」

それは本当に迂闊だったわ！

もうこんな時間だ、人が残ってるわけが無いと一人で勝手に決め付

け、戦闘に至ってしまった。

校舎に人がいるかくらい、把握しているべきだった。

これは完全に私のミス！！

彼はきつと殺される、目撃者を消すのはこの戦争の絶対的ルール
しかしこれは私のミスによって生まれた事、自分の手で殺す事が叶
わないとしても、せめて彼が死ぬのは身取ってあげたい。

頭を振り、自分を叱咤しダンサーの後を追いかけた。

遠坂凜はサーヴァントと遭遇したようです（後書き）

やっとテストが終わりました><

それと戦闘はこんな感じで大丈夫でしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1038p/>

遠坂凜がダンサーのサーヴァントを召喚したようです

2010年12月12日17時00分発行